考古学研究室報告

第53集

越高遺跡

上御倉古墳

2017年度　考古学研究室の足跡

2018

熊本大学文学部考古学研究室

表 紙 写 真：上空から越高遺跡を望む（航空写真）
裏表紙写真：上御倉古墳測量調査風景

序　文

今年度は今はやりのドローンを飛ばした。もちろん、その操縦役は２年生の１君が引き受けてくれた。思えば私たちの時代は現場で重い足場を組んで撮影をしていた。旧職場で私自身「足場組立等作業主任者」の資格をとらされた。ゆうにビルの３階ほどはあろうかという高い足場の上でもよくもあれだけ動きまわれたものだ。若さがそうさせたのだろうが、今思い出すとぞっとする。身近で不幸な転倒事故もあった。それから比べると隔世の感がある。便利になったものだ。

現場では光波測距機とプリズムで実測図を作り、３Ｄ測定器も利用されるようになった。もちろん遺物実測の場でも３Ｄ測量や写真測量は当たり前になった。ドローンの操縦がそうであったように、このような最新機器やコンピューターを使いこなすのは昨今の学生は得意である。ただ残念なことに、スコップが握れない。現場では、老体に鞭打って体を動かさねば学生はついてこないし、掘り方もよくわからないでいる。昔はこのような後進の指導は先輩学生が指揮をとってくれたが、その伝統も途絶えたか。勢い体力のある少数の男子学生を使うことになる。すまない。

どんなに科学が発達しても、ロボットが遺跡や遺構を掘るわけではない。作業員さんを指揮して発掘する場合も、担当者がスコップの使い手でなければやはりうまくない。何より発掘の醍醐味は遺物や遺構の発見であり、スコップや手スコの刃先にわくわくする期待感を込めながら土をはねていく、この一瞬・一瞬がたまらない。手スコの先にキラリと輝く土器や石鏃を見つけたときはそれまでの疲れが一挙に吹っ飛ぶ。今回は、この遺跡ではじめて遺構らしい遺構を見つけた。これにはみな大いに感動したようである。ただし、埋め戻しは見るも忍びないくらい悲壮感を帯びていた。

上御倉古墳は３年越しの墳丘測量と石室実測の成果である。担当した杉井健准教授はアナログ実測・測量の大切さを強調していた。学生も随分鍛えられたであろう。

昨今、仕事はあっても考古学の職を目指す学生が減ってきている。しかし、楽ばかりしていても何ら発見はない。時代が変わっても変らない考古学の魅力を伝えていくことが、先を歩むものの役目である。

今年も尾上博一氏をはじめとする対馬市教育委員会、長崎県教育庁文化課の皆様、調査指導にきていただいた皆様にも大変お世話になった。この方たちとの交流を通じて、少しでも自分の未来像を描いてくれた学生がいれば、この発掘は成功したといえる。上御倉古墳の調査でもたいへん多くの方々のお世話になった。心より感謝申し上げます。

未熟な報告書ではあるが、学生が自らの時間を削って頑張った成果である。まずは褒めてあげたい。この伝統を絶やすことなく続けることで、考古学の虜になる学生が一人でも増えてくれれば幸いである。

小畑　弘己

例　言

1．本書は、熊本大学文学部考古学研究室による考古学調査の報告書である。
2．本書は２部構成をとる。第１部は長崎県対馬市越高遺跡の発掘調査報告、第２部は熊本県阿蘇市上御倉古墳の測量調査報告からなる。
3．第１・２部それぞれの遺跡・調査についての詳細は、以下の通りである。

【越高遺跡】
（１）越高遺跡は、長崎県対馬市上県町越高30番地（Ａ地点）・58番地（Ｂ地点）に所在する。
（２）調査期間は、2017年９月９日～21日の13日間実施した。
（３）調査は熊本大学文学部考古学研究室と対馬市教育委員会が共同で行った。
（４）調査担当者は、小畑弘己（熊本大学大学院人文社会科学研究部教授）と廣重知樹（同文学部３年生）である。
（５）越高遺跡に対する調査は、今回の調査以前にも実施されている。それを含めて、次のように調査次数を整理する。なお、越高遺跡はＡ・Ｂ地点の２地点で構成される。第４次調査以前は、Ａ地点を越高尾崎遺跡、Ｂ地点を越高遺跡と呼称していた。

第１次調査　調査期間：1976年12月11日～17日
調査内容：Ｂ地点の発掘調査
調査主体：上県町教育委員会・長崎大学医学部解剖学第二教室

第２次調査　調査期間：1978年７月16日～22日
調査内容：Ａ地点の発掘調査
調査主体：上県町教育委員会

第３次調査　調査期間：1996年８月26日～９月13日
調査内容：Ａ・Ｂ地点の発掘調査
調査主体：長崎県教育庁

第４次調査　調査期間：2015年８月16日～24日
調査内容：Ａ・Ｂ地点の発掘調査
調査主体：熊本大学文学部考古学研究室・対馬市教育委員会

第５次調査　調査期間：2016年９月11日～22日
調査内容：Ｂ地点の発掘調査
調査主体：熊本大学文学部考古学研究室・対馬市教育委員会

第5次追加調査　調査期間：2016年10月３日～20日
調査内容：Ｂ地点の発掘調査
調査主体：対馬市教育委員会

第６次調査　調査期間：2017年９月９日～21日
調査内容：Ａ・Ｂ地点の発掘調査
調査主体：熊本大学文学部考古学研究室・対馬市教育委員会

（６）レベル高はすべて海抜を表し、方位は磁北の北を示す。
（７）土層の色調は、『新版標準土色帖』（2014）日本色研事業株式会社発行による。
（８）第１図は国土地理院発行の５万分の１地形図（三根）、第９図は同発行の２万５千分の１地形図（鹿見）を複製したものである。
（９）出土土器の放射性炭素年代測定および遺跡の地形・地質の調査に際し、小林謙一氏（中央大学）と西山賢一氏（徳島大学）より玉稿を頂戴した。
（10）調査および合宿、整理作業の実施にあたっては、以下の諸氏・諸機関からご協力とご援助を賜った。
尾上博一（対馬市教育委員会）、小林謙一（中央大学）、西山賢一（徳島大学）、鐘ヶ江賢二（鹿児島国際大学）、寺田正剛・中尾篤志（長崎県教育庁）、田中聡一（壱岐市教育委員会）、柴田亮（大村市教育委員会）、梅崎惠司（北九州市芸術文化振興財団）、野井秀明（北九州市立大学）、木村幾多郎（元九州縄文研究会会長）、甲元眞之、森先一貴（文化庁記念物課）、阿比留伴次、豊田佐伊土、本多　仁、本多武美、対馬市教育委員会、長崎県教育庁、大橋旅館（順不同・敬称略）
（11）調査参加者は以下の通りである。
小畑弘己（熊本大学教員）、岡田勝幸・豊永結花里（同社会文化科学研究科博士前期課程２年生）、新垣　匠・嘉戸愉歩（同文学部４年生）、赤峯由梨・小堀嵩史・廣重知樹・三浦　彩・安原真衣

(同文学部３年)、岩熊拓人・齋藤明日香・中野志緒莉・宮浦舞衣（同文学部２年)、河内　亮・森　悠統（同文学部１年）

(12) 第１部の編集は小畑弘己の監修を受けて廣重知樹が担当した。執筆分担は目次および各文末に示した。

【上御倉古墳】

（１）上御倉古墳は、熊本県阿蘇市一の宮町手野宮の前2295番地に所在する。

（２）調査期間は、石室実測調査が2015年７月18日、９月１～10日、９月14・15日の計13日間、墳丘測量調査が2017年４月27日、８月26日～９月４日、９月６～８日の計14日間である。これらのうち、2015年度の調査を第１次調査、2017年度の調査を第２次調査とする。

（３）調査は熊本大学文学部考古学研究室を主体とし、阿蘇市教育委員会の協力を得て実施した。調査には科学研究費補助金（基盤研究B・研究代表者杉井健）の一部を使用した。

（４）調査担当者は、第１次調査が杉井健（熊本大学大学院人文社会科学研究部准教授）と山元瞭平（同社会文化科学研究科博士前期課程１年生、当時)、第２次調査が杉井と安原真衣（同文学部３年生）である。

（５）上御倉古墳に関するレベル高はすべて海抜を表し、方位は国土座標（２系）の北を示す。

（６）横穴式石室の左右は、羨道から玄室をみた場合の左右で示す。

（７）報告書抄録に示した北緯と東経は、墳頂に設置した測量基準点F07の世界測地系による数値である。

（８）図版10-１は国土地理院保有の空中写真（CKU763-C2-39、1976年12月１日撮影）を複製したものである。

（９）調査および合宿、整理作業の実施にあたっては、以下の諸氏・諸機関からご協力とご援助を賜った。

第１次調査：宮川経幸（國造神社)、工藤徹雄（古城６区区長)、岩永昭次（阿蘇公民館古城分館長)、工藤輝光（阿蘇淡水魚センター)、福田拓也（阿蘇市教育委員会、当時)、緒方　徹（阿蘇世界文化遺産推進室)、村上浩明・田中健一郎（とっぺん)、田中裕介、志賀智史、國造神社、阿蘇公民館古城分館、阿蘇市立一の宮温泉センター、阿蘇淡水魚センター、阿蘇市教育委員会、阿蘇世界文化遺産推進室、株式会社とっぺん

第２次調査：宮川経幸（國造神社)、山部今朝範（古城６区区長)、岩永昭次（阿蘇公民館古城分館長)、工藤輝光（阿蘇淡水魚センター)、宮本利彦・入江捺月（阿蘇市教育委員会)、緒方　徹（阿蘇世界文化遺産推進室)、村上浩明・田中健一郎・石丸　凌（とっぺん)、田中裕介、志賀智史、國造神社、阿蘇公民館古城分館、阿蘇市立一の宮温泉センター、阿蘇淡水魚センター、阿蘇市教育委員会、阿蘇世界文化遺産推進室、株式会社とっぺん

(10) 調査参加者は以下の通りである。

第１次調査：杉井　健（熊本大学教員)、與嶺友紀也（同社会文化科学研究科博士前期課程２年生)、山元瞭平（同社会文化科学研究科博士前期課程１年生)、秦　翔平・宮崎大和（同文学部４年生)、大隈彩未・竹村南洋・松浦正朋（同文学部３年生)、嘉戸愉歩・稗田　翔（同文学部２年生）

第２次調査：杉井　健（熊本大学教員)、岡田勝幸・豊永結花里（同社会文化科学研究科博士前期課程２年生)、新垣　匠（同文学部４年生)、赤峯由梨・小堀嵩史・廣重知樹・安原真衣（同文学部３年生)、岩熊拓人（同文学部２年生）

(11) 第２部の編集は杉井健の監修を受けて安原真衣および山元瞭平（大野城市教育委員会）が担当した。執筆分担は目次および各文末に示した。

本　文　目　次

第１部　越高遺跡調査報告……1
一　位置と環境……3
１．対馬の地理的環境と越高遺跡の立地……3
（１）対馬の環境 ……齋藤明日香……3
（２）越高遺跡の位置と立地 ……〃……4
２．対馬の歴史的環境……5
（１）対馬の原始・古代 ……5
縄文時代……岩熊拓人……5
弥生時代……〃……5
古墳時代……中野志緒莉……5
古代以降……〃……6
（２）対馬における遺跡立地の変遷 ……宮浦舞衣……6
二　越高遺跡の調査……8
１．調査経過……8
（１）既往の調査 ……齋藤明日香……8
（２）今回の調査（第６次調査）……廣重知樹……10
２．越高遺跡Ａ地点……12
（１）調査区の設定 ……赤峯由梨……12
（２）遺跡の層序 ……〃……12
（３）遺物出土状況 ……〃……13
３．越高遺跡Ｂ地点……15
（１）調査区の設定 ……小堀嵩史……15
（２）遺跡の層序 ……〃……15
（３）遺物出土状況 ……〃……15
４．出土遺構……18
（１）遺構の性格 ……赤峯由梨……18
（２）出土遺物 ……〃……18
（３）遺構の時期 ……〃……18
５．出土遺物……20
（１）土器 ……三浦　彩……20
（２）石器 ……安原真衣……22
（３）その他 ……〃……23
三　自然科学分析……34
１．放射性炭素年代測定……パレオ・ラボ……34
２．対馬越高遺跡出土炭化物の ^{14}C 年代測定 ……小林謙一……37
３．越高遺跡Ｂ地点　地形・地質調査結果……西山賢一……43
四　まとめ……廣重知樹……49

第２部　上御倉古墳測量調査報告……53
一　古墳の位置と調査経過……55
古墳の立地……杉井　健……55
過去の調査……〃……55
今回の調査……〃……56
二　墳丘の構造……安原真衣・杉井　健……57
三　石室の構造……60
玄室……山元瞭平……60
遺体安置施設……〃……63
前室……〃……64
羨道……〃……65
石室構築の手順……〃……65
装飾と赤色顔料……〃……66
四　採集遺物……66
須恵器……山元瞭平……66
小結……〃……66
五　まとめ……山元瞭平……67

図　版　目　次

越高遺跡

図版１　１　越高遺跡遠景（北東から）
２　Ａ地点調査前近景（東から）
３　Ｂ地点調査前近景（南から）
図版２　１　空から見た調査区（北東から）
２　Ａ地点調査区全景（上が西）
３　Ａ地点土層堆積状況（北から）
図版３　１　Ａ地点遺物出土状況（南西から）
２　Ｂ地点調査区全景（上が北）
３　Ｂ地点土層堆積状況（西から）
図版４　１　Ｂ地点遺物出土状況（北東から）
２　遺構検出状況（東から）
３　遺構と土層堆積状況（北東から）
図版５　１　遺構完掘状況（東から）
２　Ａ地点出土土器（１）
図版６　１　Ａ地点出土土器（２）
２　Ａ地点出土土器（３）
３　Ａ地点出土土器（４）
４　Ａ地点出土土器（５）
図版７　１　Ｂ地点出土土器（１）
２　Ｂ地点出土土器（２）
図版８　１　Ｂ地点出土土器（３）
２　Ｂ地点出土土器（４）

3　第５次追加調査出土土器
図版９　1　Ａ地点出土石器
2　Ｂ地点出土石器（１）
3　Ｂ地点出土石器（２）

上御倉古墳
図版10　1　上御倉古墳の立地（丸が上御倉古墳、すぐ右の小丘が下御倉古墳）（1976年12月1日撮影）
2　上御倉古墳が立地する谷筋を南から望む
図版11　1　上御倉古墳の現状（北西から）
2　上御倉古墳の横穴式石室開口部（南から）
図版12　玄室奥壁
図版13　玄室前壁
図版14　1　玄室右側壁の腰石
2　玄室左側壁の腰石
図版15　1　石屋形床面
2　石屋形屋根石
3　玄室天井部（右が奥壁側）
図版16　1　前室後壁
2　前室前壁
図版17　1　前室右側壁
2　前室左側壁
3　前室天井部（右が玄室側）
図版18　1　羨道側からみた前門
2　羨道から羨門部を望む
図版19　1　羨道右側壁
2　羨道右側壁の羨門立柱石
3　羨道左側壁
図版20　1　羨門
2　上御倉古墳採集須恵器

挿　図　目　次

第１図　越高遺跡位置図 …… 3
第２図　対馬の地質図 …… 4
第３図　越高遺跡で採集された土器 …… 8
第４図　第１次調査　調査区位置図 …… 8
第５図　第１次調査　土層断面図 …… 9
第６図　第２次調査　調査区位置図 …… 9
第７図　第２次調査　土層断面図 …… 10
第８図　第２次調査　検出炉跡図 …… 10
第９図　越高遺跡Ａ・Ｂ地点位置図 ……（廣重作成）…… 11
第10図　Ａ地点測量図 ……（宮浦作成）…… 12
第11図　Ａ地点調査区西壁土層断面図 ……（三浦作成）…… 14

第 12 図　A地点調査区南壁土層断面図 ……（三浦作成）……14
第 13 図　B地点測量図 ……（廣重作成）……16
第 14 図　B地点トレンチ（A）東壁土層断面図 ……（小堀作成）……17
第 15 図　B地点調査区北壁土層断面模式図 ……（安原作成）……17
第 16 図　A地点出土遺構平面・立面・土層断面図 ……（赤峯・三浦・安原作成）19
第 17 図　遺構内出土土器 ……19
第 18 図　出土土器実測図（A地点）……24
第 19 図　出土土器実測図（A・B地点）……25
第 20 図　出土土器実測図（B地点）……26
第 21 図　出土土器実測図（第５次追加調査出土）……27
第 22 図　出土石器実測図（A地点）……32
第 23 図　出土石器実測図（B地点）……33
第 24 図　暦年較正結果 ……（パレオ・ラボ作成）……36
第 25 図　越高遺跡出土試料の較正年代（１）……（小林作成）……41
第 26 図　越高遺跡出土試料の較正年代（２）……〃……42
第 27 図　越高遺跡出土試料の較正年代（３）……〃……42
第 28 図　越高遺跡の地形概要 ……（西山作成）……46
第 29 図　ベンチから見た越高遺跡の立地地形 ……〃……46
第 30 図　谷壁面の地質断面（山側）……〃……47
第 31 図　谷壁面の地質断面（海側）……〃……47
第 32 図　海食崖面の地質断面 ……〃……47
第 33 図　底面に露出した対州層群（ベンチ）……〃……48
第 34 図　西九州の水中遺跡とハイドロアイソスタシーによって推定された 7000 年前の海水準高度 ……〃……48
第 35 図　越高遺跡周辺の推定地形・地質断面 ……〃……48
第 36 図　阿蘇地域の古墳分布と上御倉古墳の位置 ……（杉井作成）……55
第 37 図　上御倉古墳墳丘測量図 ……（安原作成）……58
第 38 図　上御倉古墳墳丘横断面図・縦断面図 ……（杉井作成）……59
第 39 図　上御倉古墳墳丘形態復元想定図 ……〃……59
第 40 図　上御倉古墳石室実測図 ……（山元作成）……61・62
第 41 図　上御倉古墳採集須恵器実測図 ……〃……66

表　目　次

第１表　越高遺跡基準点座標一覧（局地座標）……（廣重作成）……11
第２表　出土土器観察表……（三浦作成）……28
第３表　出土石器観察表……（安原作成）……33
第４表　測定試料および処理……（パレオ・ラボ作成）……34
第５表　放射性炭素年代測定および暦年較正結果……〃……35
第６表　上御倉古墳基準点の現場座標……（杉井作成）……56
第７表　上御倉古墳基準点の国土座標……（杉井作成）……56